



## 『アリとキリギリス』派?それとも『フレデリック』派?

園長 山中 文

イソップ物語に『アリとキリギリス』のお話があります。原作では「キリギリス」ではなく、「セミ」だったと聞いていますが、ここではとりあえず「キリギリス」としましょう。こんなお話でした。

キリギリスはずっと歌って遊んでいる。一方アリはせっせと食べ物を蓄えている。冬になると、キリギリスには食べ物がなくなり、アリにもらえるように頼みに行くが・・・。

これと同じように、せっせと働く仲間たちをしり目に別のことをして、やがて冬をむかえるという設定のお話には、『フレデリック』があります。こちらは、レオ・レオニの作品です。

野ねずみたちが、せっせと冬に備えて食べ物を蓄えている。仲間の中で、野ねずみのフレデリックだけは何もせずにぼんやりしている。でも、フレデリックは冬にみな役にたったのだ・・・。

ここで二つのお話を最後まで言うのはいけませんでしょうが、結末では、『アリとキリギリス』に厳しい現実が、『フレデリック』にほんわかとした生活が見えてきます。『アリとキリギリス』の方は、原作の意図はともかくとして、みなと同じように働くことが大切だ、という見方を子どもたちに自然に教えこませるような気がします。対して『フレデリック』の方は、みなが同じ仕事をやっていなくても、それぞれのやっていることがみな役に立つのだ、という新しい見方をみせているように思います。

さて、お子さんに本を読み聞かせするとしたら、どちらを選ばれるでしょうか。

私は、どちらの見方にも気づいてほしくて、両方とも読んできかせました。子どもたちは、『アリとキリギリス』も筋がわかりやすいこともあって喜んで見ましたが、『フレデリック』の方は何度も「読んで」とせがんだり、結末についていろいろと聞いてきたりしました。

絵本によって、子どもたちは想像の世界を広げ、さまざまな価値観や見方を広げていくことができます。ただ、同じような方向を向いた絵本は、ともすると、価値観や見方を固定化することにもなりがちです。それを意識しすぎて本を選ばなくなってもいけません。本を選ぶときに、この本ならどんな風に取り取るかな、と考えてみるのもいいかもしれませんね。

見方を変える、という点からすると、ENEMY PIE (Derek Munson 作) も、面白い作品です。残念ながら、まだ日本語訳がありません。

ある子どもが、隣に越してきた子どもが嫌な感じなのでなんとかしてやりたい! と思っておとうさんに話したら、おとうさんが、「それならいい方法がある」とパイを焼いてくれる。「これをその友達に食べさせるんだ」とおとうさんはニヤリとするが、ただし、友達をつれてきて、自分の目の前で食べさせないと効果がないという。その子は友達にパイを食べさせるかどうかで葛藤しながら・・・

お話では、主人公の子どもがエネミーパイを食べさせるために友達をつれてくるうちに、友達を「嫌だ」と感じる気持ちや食べさせようとしていた気持ちが刻々と変わっていく様子がよくわかります。友だちとのかかわりが増えてトラブルも経験する年中さん以降の子どもたちであれば、主人公の気持ちの変化を自分のことのように思って読み進めることができるのではないのでしょうか。

原著は英語ですが、スペイン語や中国語にも翻訳されています。中国の留学生に聞いた話ですが、その留学生の経験では、絵本の読み聞かせは、日本のようにストーリーに沿ってそのまま読み進めるのではなく、場面ごとに止めて、「ここでは何が起きているのか」とか「どうしてこのような行動をしたと思うか」等々、みなで話し合いながら読み進めるのだそうです。ところ違えば、読み聞かせも違うものですね。

